

「飯舘村の母ちゃんたち」通信 No14

2020年1月発行

震災からの9年間を記録した第2作

岡戸 良子（映画「飯舘村の母ちゃん」制作支援の会代表）

新年おめでとうございます。

震災から9年を迎える年となりました。皆様からの募金で完成した映画「飯舘村の母ちゃんたち 土とともに」は、2016年5月から劇場公開を開始し、現在は、皆様のご支援の下、息長く自主上映会を全国、海外でも継続出来ていることに改めてお礼を申し上げます。

未曾有の大震災と原発事故に見舞われた福島のこの9年間に「復興」という文字があっても、現実はどうなのでしょう？ 私は、福島を訪問するたびに、ここに生きる方々、生きていかなければならない方々の尊厳が傷つけられていることを実感します。2019年9月30日、東京電力は福島第2原発4基全てを廃止した届け出を経産相に提出しました。しかし廃炉完了には今から40年以上もかかります。汚染土壌は、中間貯蔵施設への搬入が始まったばかりで、仮置き場に置かれているフレコンバッグの数は472万余。第一原発で溜まり続ける汚染水は118万トン。敷地内に置かれているタンクの数約1千基に達しているそうです。その限界もあり希釈して海に流すことまでも言及し始めています。

このような数字を見るたびに、私たちは、オリンピックを含めた復興パフォーマンスに決して踊らされてはならないと強く思います。

福島に住む方々の尊厳を傷つけ、先祖から引き継いで慈しんで育ててきた自然が放射能

汚染によって一気に破壊されたことは、地球の尊厳をも傷つけたこととなります。

私は、映画に登場された菅野榮子さんを監督と一緒に、昨年訪問する機会がありました。飯舘村に帰村をして、日常を取り戻そうとしている榮子さんから「人間は自然がなければ生きていけないね」の一言が今でも心に重く残っています。映画の中で自分らしさを保ってくれた畑はもうなく、現在は小さなプランターでの野菜づくりしかできません。除染後の土は、野菜作りには全く適していないということでした。飯舘村の開墾から何代もかけて土壌を育ててきた自然の恵みが壊されたのです。昨年11月に来日されたカトリックの教皇も、地球に生きる私たちとその自然のいのちと資源を大切にしなければならないというメッセージを残されました。今を生きる私たち一人一人が次世代に震災の記録を残していかなければと改めて強く願っています。

現在古居監督は、飯舘村の震災からの9年間を第二作目として準備しています。そこには、人と自然の共生と尊厳が描かれ、そしていつもの古居監督の特徴でもある人間力に焦点があてられると期待しています。

第二作目も皆様の募金により、映画の完成実現を目指しています。引き続きの変わらぬご理解とご支援を改めてここにお願ひ申し上げます。新年のご挨拶といたします。

いいたてだより 2019

古居 みずえ（映画「飯舘村の母ちゃん 土とともに」監督）

昨年5月から12月まで、「飯舘村の母ちゃんたち」のフェイスブックに飯舘村の現在の様子を伝えるために「いいたてだより」を掲載しました。ご覧になっていない方もいらっしやると思いますので紙面で紹介いたします。

1 ゴンボツパ採り

5月の終わり、雨がばらばらと落ちていたが、映画「飯舘村の母ちゃんたち 土とともに」に登場していた榮子さん、芳子さんは南相馬近郊の知人の農地で育ててきたゴンボツパを収穫に出かけた。榮子さんたちは頼まればゴンボツパ生育の指導や世話もしている。

ゴンボツパとは、飯舘村の人たちが作ってきた保存食、凍み餅の中に入れる欠かせない食材だ。初めて名前を聞いたときは何か冗談かなと思ったが、正式の名前だそう。

ゴンボツパは、学名オヤマボクチともいわれ、葉はゴボウの葉に似ているので、ゴンボツパと呼ばれるらしい。このゴンボツパには

餅がバラバラにならないようにつなぐ役目があるそうだ。今年の収穫も終わりに近づいている。



ゴンボツパの葉

2 フレコンバッグ（除染廃棄物）

先日、知人たちが福島県飯舘村を回るのに同行した。飯舘村は帰還困難区域の長泥地区を除き、2017年3月末に避難指示解除になっ



芳子さんは胃の手術後も元気に暮らしている。



ゴンボツパを練り込んだ凍み餅

たところだ。案内についてまわっている間気が付いたことだが、知人はフレコンバッグ(除染廃棄物)を見るたびに、

「これは何、これを毎日見て暮らすの?」と驚きの声をあげているのを見て、私はショックを受けた。何度この光景を見たことだろう。でも何度も通っているうちに、私の神経はマヒして、こんなものだと思うようになっていた。改めて、フレコンバッグがこれほど残っていることに、驚かされた。村民の方の話に

よれば、そのフレコンバッグの一部はオリンピックの聖火が通るところからは見えないように運ばれ始めているという。



▲
村内のあちこちに積んであるフレコンバッグ

3 取材の足

私は取材するのに足がない。要は車が運転できないのだ。今までは中東の取材では運転手付きの車で取材に回ることが多かった。というか、どんなに運転がうまい人でも地元の運転手にはかなわないからだ。それをいいことに私は不便を感じてこなかったのだが、日本国内での取材となると足がないことがもろ響いてくる。映画「飯館村の母ちゃんたち 土とともに」ではそのときどきで友人や支援の会のメンバーの車に乗せていただき、お世話になった。しかし飯館村の母ちゃんたちも今では新しい生活に踏み出しているか、帰村しているか、復興住宅に入っているか、それぞ



新天地に向かうと仮設住宅での絆もなくなる
れがばらばらになっているのだ。追いかけていくこちらは大変だ。と言いつつ、頑張るしかない。

4 やませとひまわり

あと少しで梅雨が明ける。飯舘村でよく見られるやませ。やませとは霧が立ち込めることをいうのだと長い間、思っていた。良く調べるとやませとは、主に東北地方などで吹く冷たく湿った東よりの風をいうのだそうだ。飯舘村にいと春から夏の季節は特によく出くわす。

2011年4月、相馬まで行くのに、飯舘村を通り過ぎた。その時の飯舘村は雨に濡れていて、山には霧が立ち込めていた。きっとやませの日だったのだろう。暗く、不気味な気がした。そして5月に本格的に訪ねたときは春の晴天の日で、花々が咲き、なんと綺麗なところだと思った。

2018年7月、やませの日、除染した田畑にヒマワリがあちらこちらに咲いていた。何もなかったかのように。



5 お彼岸の中日

昨日はお彼岸の中日だった。台風が来るといふニュースに、中日の前にお参りをした人が多いようで、人の姿は閑散としているのに、お花だけはきれいに飾られていた。

飯舘村の人たちは先祖や伝統を重んじる。お彼岸になると必ず、家族でお墓参りに行く。私も何度か同行した。お彼岸にはお赤飯を炊く人、おはぎ(小豆やズンダ)を作る人、様々

に家庭の味があるという。仏前や神前にはお盆のときのようにお供えをする家庭もある。



お供え用におはぎや料理を作る

お墓は比較的大きく、親戚のお墓も近辺にあたりして、花や線香を持ってたくさんのお墓を回る人たちもいる。

ちなみに線香は避難している人たちが多く中、火事につながる恐れがあると線香に火をつけしないで横にして置く。

なぜかお墓の前とか横には、除染廃棄物のフレコンバッグが置いてあることが多い。周辺の空間線量は0.4~0.5マイクロシーベルトと高い。お墓に眠っている人たちもいつまでフレコンバッグを見下ろしていなければならないのだろう。



6 台風19号

台風19号、そして10月25日の大雨の被害を受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げます。

福島では大量の雨が降り注いで、川の氾濫、土砂崩れが起こり、いわき市、本宮市、郡山



市、伊達市、相馬市など大きな被害が出た。

飯舘村でも台風之夜、新聞を搬送していた川俣の男性が1名亡くなった。道の駅は大丈夫だったが、その周辺の田圃には水があふれたという。

台風19号のあと、そして25日の雨のあとも土砂くずれなどにより福島～南相馬間などバスの運休も相次いでいる。

村内の道路の脇が崩れ落ちたところは通行制限されていた。飯舘村の道のあちらこちらには山から流れ出る水が道路に流れ、そして川に流れている。飯舘村の7～8割は山だ。その山は除染されていない。除染されていない山から流れ出る水は汚染されているだろう。今回も多くフレコンバッグが田村市や川内

村では流れたという。飯舘村も一個流れたと聞く。以前、村で流れた経験があるが、その教訓は生かされていない。これから大雨、大雪は降るだろうし、その対策は万全でなければならない。

飯舘村の山々が赤く色づき始めている。秋も深くなる。自然の恐ろしさを改めて感じた秋だ。

7 飯舘村の秋

飯舘村のあちらこちらには台風の爪痕が残されている。知人のところは道が通行止めとなっていて、未だに迂回しなければ自宅にたどり着けない。以前見かけた通行止めの道もまだ直っていなかった。

村内を回ると相変わらず、フレコンバッグが並んでいる。ソーラーパネルも並んでいる。村民の姿はほとんど視界に入っていない。

今年は温暖化の影響か、紅葉が遅れた。例年のようにあざやかな紅葉がみられない。いつもなら11月の初めには紅葉が終わるぐらいだった。さらに先週は霜が降った。紅葉は霜が降ると終わるといふ。葉が枯れて落ちて



台風の影響でめくれあがってしまった道路。



今年の紅葉は色がよくない。

しまうからだ。今年の紅葉は短い命のようだ。もうすぐ厳しい冬がやって来る。

8 例大祭

今年も山津見神社の例大祭が行われた。原発事故以前は毎年旧暦の10月15～17日に開かれ、最後の日、17日は「山御講（やまおこ）」と呼ばれ、全国各地から信者が集まり、例大祭にはおよそ3万の人たちが集まっ



う。映画「飯舘村の母ちゃんたち 土とともに」の榮子さん、芳子さんも茶屋で30年ぐらい中心となって働いてきた。餅やおふかし（おこわ）を作り、茶屋で売っていたのだ。榮子さんは「山仕事に従事する人たちを守る神様だから、全国から人が来ていた。あの頃は若かった。楽しかったな」とよく言っていた。

今年は避難解除して2年目の冬だ。昨年よりはお参りする人も増えたが、今年も茶屋はない。参拝客の中には「1日でなく、もっとやってほしい」「茶屋も欲しいな」とか「作る人が高齢だからどうかな」という話が出た。飯舘村の女性が「参拝する人で村民の姿が少ない」と話していたのに少し驚いた。

9 動物天国

飯舘村は東京電力福島第一原発事故により、2011年4月に計画的避難区域に指定され、全村避難となった。村民が避難している間に台頭してきたのが、野生の動物たちだ。イノシ





シをはじめ、猿、ハクビシン、うさぎ、熊など。私がよく見かけるのはやはりイノシシと猿だ。イノシシは家族連れでのっしのっしと人道を横切る。猿は群れとなって行動している。いるだけならまだいいが、作物を荒らす。

2017年3月に避難解除となった。村に帰って畑作業をする人も出てきた。畑をやってネギやカボチャ、ダイコンが食べごろになると出てくるのがイノシシや猿だ。

村民のひとりは一度に猿が20〜30匹きた。追い払おうとバケツでたたくと餌をくれるかと思って寄って来たという。

村は動物対策として、畑作業をする人に電柵を提供している。それでイノシシは撃退できても、猿は電気を通した柵の隙間から入ったり、飛び越えて入る。被害は後を絶たない。当然、村民と動物たちとの闘いは続きそうだ。

10 聖火ランナー

オリンピックの聖火ランナーのコースが発表になった。普通なら喜ばしいところだが、

コメ粒に見えるが猿の軍団だった。手前がボス猿か？

今回は複雑な気分だ。オリンピックは好きだし、スポーツを見るのも好きだ。でも今の日本の状況を考えると、東日本大震災の津波や原発事故で被害を受けた方々の避難生活が今でも続いているし、その後も熊本、広島、台風19号と災害があとを絶たず、元の生活を取り戻せない人たちがたくさんいる。政府の唱える復興の名の下に、オリンピックの名の下に、多くの人たちが未だ苦しい生活を強いられている現実はいくら隠されている。

そしてまだ線量の高いところもある福島で聖火ランナーが走るということは驚きだ。飯舘村のコースも決まった。飯舘村のふれあい館から道の駅までだ。ここにはフレコンバッグ（除染廃棄物）は見えないが、別の通りには緑色のフレコンバッグが並んでいて線量も下がっていないところがある。

確かにスポーツで被災地を元気づけることは必要だが、つらい現実が続いている人がいる限り、まずオリンピックまでに政府はその解決を急ぐべきだと思う。



左…福島民友の記事
ふれあい館
右…出発点の

自主上映会のお願い



あなたの地元で、職場で、グループで、自主上映会を開いてみませんか

★基本上映料は1日何回でも4万円！

基本上映料1回6万円を1日4万円に改定、入場者100名まで。100名を超えた場合は、1名につき200円加算。1日何回上映しても基本上映料は変わりません。

★ご予算、広報等のご心配はご相談を

会場費が高くて上映料が払えるか心配等々何でも相談に乗ります。

＊お問合せ、お申込みは下記まで！！

東日本大震災から9年目を迎え、その悲惨さや悲劇は人々の記憶からどんどん遠ざかっています。しかし、地震、津波は自然災害であっても原発事故は人災です。原発事故の直後は、計画停電もあり、節電が叫ばれ、エネルギー政策の見直しの声も上がりました。それらはすっかり忘れられ、街は電気の光で溢れ、オリンピック気分に浮かれています。

そんな今だからこそ、映画「飯舘村の母ちゃんたち」を通して、事故から学んだことをもう一度思い出していただきたいのです。

通信発行：映画「飯舘村の母ちゃん」制作支援の会

〒169-0072 東京都新宿区大久保3-10-1-834 Fax 03-3209-8336

メール iitate.motherprojects@gmail.com TEL 090-7408-5126